

= 想いを遂げに =

(この時期適切ではない表現もありますがお許しください。)

ちょっと古い話になるが、昨年の秋に見たい映画があった。司馬遼太郎の「燃えよ剣」。新選組副長土方歳三の生涯を描いた物語。映画が先か、原作を読むのが先か、人それぞれに考えの違いはあるが私は後者。残念ながら、上・下巻読み終えた時期には上映は終了していた。コロナ感染も気になり二の足を踏んだこともあるが、なんとも詰めの甘い話である。

新選組と言えば浪士を斬りまくった人斬り集団と揶揄されることも多く、数々のフィクション作品の影響によって、そのイメージが強い。しかし、幕末の京都治安維持活動に携わり、実際には捕縛を原則としており、犯人が抵抗してきたときには斬り捨て御免だったという。

主人公、土方歳三がなぜ最後まで戦い続けたのか。諸説あるようだが、新選組局長近藤勇の捕縛と処刑にあるというのが信ぴょう性ありとみる。近藤勇は慶応4年1868年4月25日板橋宿の馬捨場で切腹することも許されず、罪人として斬首された。このことは、新政府軍が新選組を武士として遇さず、その誇りを泥足で踏みにじったに等しい。

それは幕末に命懸けで任務にあたった新選組を根底から否定するものであり、新選組副長として断じて許せるものではなく、もし自分が敵に降伏するようなことがあれば、それは新選組の否定を自ら認めることになる。それでは新選組を信じ、あるいは厳しい隊の規律(局中法度を破れば切腹)に則って命を落としてきた多くの隊士たちに顔向けができない。近藤と新選組のためにも、自分が降伏することはあり得ない。その一心で、戦い続け、最後は五稜郭の戦いで生涯を終えた。新選組の存在と土方歳三の位置づけ、是非はともかく、その生き様は見事。次代も、形も違うが軸をぶらさぬ信念はなぜか共感する。生きてさえいればきっと明治の要職に就けたはず。

この物語の中で、戦(いくさ)、土方風に言えば喧嘩について語るところがある。「勝つためには策が要る。策を立てるためには偵察・ものみが十分でなければならない。喧嘩の常法ですよ」と。まさに孫氏の兵法にいう「彼を知りて己を知れば、百戦して殆うからず」。敵情を知って味方の事情も知っていれば百回戦っても危険が無く、敵情を知らないで味方の事情を知っていれば勝ったり負けたりし、敵情を知らず味方の事情も知らないのでは戦うたびに必ず危険になる。ということ。

己を知るという点では、私たちは参議院議員選挙での度重なる敗北による悔しい経験と政策実現活動総括もふまえ、自らの弱き部分を知っている。そのもとで、私たちは四囲の状況もふまえ策を立て、あらためて自らの候補を擁立し、みたび参議院議員選挙に臨む決意をした。軸をぶらさず、今は勝つことだけに執念を燃やすときである。

そのためにも、この機会に話しておかなければならないことがある。小さな体で、休む間も惜しんで、笑顔で全国行脚している村田きょうこ。その「きょん・きょん」の笑顔が一瞬消えたことがあった。昨年11月、鹿児島のお父様が他界。せめて、代表として私だけでもお悔やみに行かせてほしいと言ったのだが、彼女は「今、私がしなければならないことは、ご苦勞をかけて準備していただいたスケジュールのもとに、皆さんにお会いし、支持をいただき、国会議員になって恩返しをすることです。」ときっぱり。辛い気持ちを胸の内に収めた姿に心が痛んだ…。そして、「勝って、父に報告したい」。その声なき想いも私には聞こえた。

いよいよ本番まで2か月。取り巻く情勢を把握し、冷静にわが陣営を見据え、来るべき決戦に臨む。

仲間の笑顔をつくるため、JAMの皆さんにタスキをつなぐため、そして、きょん・きょんの想いを遂げるため。

ご安全に

2022年5月1日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一